

万次郎人生の概観④

「カリフォルニア・ゴールドラッシュ」と万次郎」

(1)「カリフォルニア・ゴールドラッシュ」

1848年から1855年にかけて「ゴールドラッシュ」と呼ばれる金採掘の流行現象が発生し、カリフォルニアは、その採掘者でごった返した。事の発端は、1848年1月24日サクラメントに近い山中の製材所で金が発見された。この情報は、瞬く間に広がり、全米や世界各国から家族を連れて金脈を発見するため採掘者がカリフォルニアをめざした。

この影響で僅か200人ほどの寒村(1846年頃)であったサンフランシスコは、1852年には36,000人余りの新興都市に変貌していた。カリフォルニアは州憲法が起草され、知事や州議会議員が選出され、合衆国31番目の州となった。

(2)万次郎「一獲千金」をめざし、カリフォルニアに…

この情報は、フランクリン号で捕鯨からニューベッドフォードに帰港した万次郎のもとにももたらされた。これを帰国のための資金稼ぎにしたいと考えた万次郎は、ホイットフィールド船長に相談し、カリフォルニアに金堀に行くことにした。掘削のための道具を近辺で揃え、木材を積載したスティグリッツ号(349トン)で水夫として雇われ、働きながらカリフォルニアに向かうことにした。1849年11月27日、ニューベッドフォードを発ち、ケープホーンを回って、北上して1950年5月下旬にサンフランシスコに到着した。

万次郎のように捕鯨船乗組員も、大勢が金採掘に仕事を替え、金鉱掘りに転向した。これがその後の米国捕鯨の衰退する一因となった。

サンフランシスコに着いた万次郎は、「唐人の宿屋」に泊まった。食事は、久しぶりに食べる米飯と豚肉・牛肉・魚肉などが出された。宿代は1日1ドル半で3日間ここに逗留して状況分析した。その後、万次郎はサクラメント川を蒸気船に乗り廻り、サクラメントに到着した。サクラメントはカリフォルニア州の州都であり、現在はサンフランシスコから車で1時間半あれば行ける。サクラメントの街から、万次郎は荷馬車を借りて代金に5ドルを払い、野宿しながら金山をめざした。自分で作ったパンと牛豚の塩肉を5日分持参していた



↑『郷土の先人 ジョン万次郎 ―日本のとびらを拓いたひと―』土佐清水市教育委員会(2020年)17頁掲載図より転載。

ので、ヤカンでお湯を沸かし夕食を取った。そうこうして5日目の夕刻にやっと金山に到着した。しかし、万次郎が行った金山が、どこか資料もなく、特定することはできない。

(3)金山での万次郎

金山に着いた万次郎は、金を掘るノウハウもない中で、1日6ドルの契約で雇われ人足として働いた。親方は米国生まれのオランダ人で住み込み食事付きで働いた。約4.4kgの金塊を掘り当て、親方は大金を手にしたが博打でそれを全部摩った。その後、万次郎たちに賃金が支払われることはなかった。親方は、凶暴であり、賃金を催促すると命さえ奪われるような身の危険があった。万次郎は決断が早く、そこをさっと辞めて、自分で金を掘ることに切り替えた。

友だちと一緒に更に奥の山に登り、掘ることにした。万次郎が賢いのは、昼間の暑い時間帯に休み、朝夕の涼しいときに作業をしたことである。結果、70日余りで600ドルほどを得ることができた。

一獲千金をねらい金鉱掘りに来て、金儲けできた人はごく僅かであった。そのような実状の中、600ドルを得ることができた万次郎は、稀にみる幸運の持主といえるだろう。金山での万次郎は、2挺拳銃を持っていたという。琉球での取り調べの際に、「盗賊防之ため懐中铁炮二挺取入持越」と記録されていることや、所持品のリストに「懐炮、二挺」あることがその証拠である。「懐炮」とは鉄砲のことである。この二挺の鉄砲は戦前まで中濱家に残っており、4代目中濱明氏がそれを確認している。



日本人ではじめてジーンズをはいたジョン万

↑絵：依岡みどり『郷土の先人 ジョン万次郎 ―日本のとびらを拓いたひと―』土佐清水市教育委員会（2020年）17頁挿絵より転載。

(4)600ドルを持ってハワイに、そして、帰国を決意！

普通、お金を持つと欲が出て、まだまだ儲けたいと考えるものだが、万次郎にはそれがなかった。それは資金稼ぎがあくまでも帰国のための一つの手段として心に決めていたからにはほかならなかった。万次郎は600ドルを手にした金山を下り、サクラメントに戻り、サンフランシスコで船便を待った。商船エライシャ・ワーウィック号（350トン）に水夫として雇われて乗り込み、1850年9月17日、サンフランシスコを出港し、ハワイオアフ島・ホノルルをめざした。

エライシャ・ワーウィック号は、1850年10月10日ホノルルに着いた。万次郎は、伝蔵（筆之丞）・五右衛門・寅右衛門らと再会した。唯一人重助は病死し、カネオへ葬られていた。寅右衛門は万次郎より11歳年長で34歳になっていた。既にホノルルで大工として生計を立て妻もいた。ここハワイに永住することを決めた。

万次郎は、残った伝蔵、五右衛門の3人で帰国の計画を立てることになる。この後、琉球、薩摩、長崎を経て、土佐へ帰国することになるがこれについては次回に記すことにする。

600ドルの価値＝僅か2か月余りで万次郎が稼いだ金額が600ドル。同じく万次郎が、フランクリン号で3年間働いた金額が370ドル。これだけでも万次郎が金山で多額の帰国資金を調達したことが理解できる。